

チェルノブイリ通信

<https://www.cher9.org/>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2-5-11-5F
TEL/FAX: 092-260-3989
E-mail: jimu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.

132

特集 原発事故の実像

CONTENTS

原発事故からの復興はない / 福島（ふくこう）のために（農と交流からの再生） / コラム ミンスクの1日 / リサイクル募金きしゃぽんのお礼とご紹介 / 講演会開催のお知らせ / 支援者のお名前とメッセージ



露店に集まる子どもたち
(2006年)

ホームページではカラー版を公開中
↓アクセスはこちらから



本紙はチェルノブイリ医療支援ネットワークの活動を
支援して下さっている皆さまへお届けしています。
送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

ゆうちょ銀行	記号 17460 番号 52319621
楽天銀行	他の金融機関からは 七四八支店 （普）5231962
住信SBIネット銀行	ジャズ支店（支店番号201）（普）7017104
	法人第一支店（支店番号106）（普）1030416
※口座名はいずれも「NPO法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」	

特別
寄稿

原発事故からの復興はない

飯舘村農民見習い

伊藤延由

1 はじめに

私は、縁あって2009年11月飯舘村に入植し、民間企業が作った研修施設「いいたてふあーむ」の管理人に就いた。2010年3月、併設の農地約1.7haの水田と約1.0haの畑で農業を始めた、農業は未経験の分野であったが、近隣の農家の方々の支援で大成功で終えた。翌年は規模を拡大し約6.0haの水田耕作を予定し準備のさなか震災に遭遇した。飯舘村の災いは3.11の地震での被害は軽微だった。災いは3月15日の夕方に襲った福島第一原発事故で放出された放射性物質の降下によるもの。

飯舘村は一月以上経た4月22日に漸く計画的避難区域に指定され、1か月以内に村外に避難せよと言うものだった。しかし、すでに原発立地自治体からの避難者で都市部の空き部屋はいっぱいで、飯舘村の住民が避難先に落ち着い

たのは、仮設住宅の建設を待つてだった、それは6月末から7月初旬だった。

私は7月上旬、福島市松川町の雇用促進住宅の空き室に避難し、施設の保守管理のため村に通っていた、避難指示は2017年3月末に解除された、私は2018年11月末に村に帰還した。

たまたま、飯舘村の汚染調査の為に来訪された今中哲二氏（当時、京大原子炉実験所助教）や



自然豊かな飯舘村は石材の村としても知られ、みかげ石も特産品です。役場前のお地藏様の頭をなでると、「村民歌」が流れます。

木村真三氏（獨協医科大学准教授）の指導を受け、測定機器の貸与を受けて今日まで測定を続けている。

2 原発事故の見方

2011年3月15日に飯舘村を襲った放射線の値（空間線量率）は、44.7マイクロシーベルト/時（ $\mu\text{Sv/h}$ ）でした。通常事故がなければこの値は0.04〜0.05 $\mu\text{Sv/h}$ で、通常時の約千倍の値だった。しかし、その時の私はその意味も理解できなかった（たまたま、当時の菅野村長の箝口令で村民に知らせることは無かった）。

そんな私が、前述の今中先生や木村先生など多くの先生の指導で放射能のことを少し理解するようになった（実際には、現在でも測る都度“これは何だ”と言う場面に遭遇し混乱しているが）。

私自身が12年間放射能を測ってきた結論は、「原発事故や核災害の大きさは、被ばくのリスクの大きさ」だと思う、人間が被ばくする放射線量の多少だと思う。

被ばくの元は大地に降下した放射性物質で、そこから放出される放射線である。

飯館村の土壌vs非汚染地域の土壌

2023.6

No	村内外	採取場所	測定日	重量 (g)	Cs計 (Bq/kg)	備考
1	村外	刈羽村	2020/11	152	23	柏崎刈羽原発構内R352号沿い
2		柏崎市	2020/4	402	12	"
3		上越市柿崎町	2021/4	229	8	柏崎刈羽原発から約30km
4		新潟市東区	2023/4	409	10	新潟市東区自宅庭
5		熊本県熊本市	2023/3	286	4	熊本県熊本市庭
6		阿蘇山	2023/3	96	3	阿蘇山中腹
7	村内	除染済み	2022年	34件	8.847	平均(村の面積の16%)
8		未除染	2022年	21件	26.776	" (村の面積の84%)

表の説明

No.1～3は柏崎刈羽原発周辺の状況

一箇所の発電所では世界一の発電量を誇る原子力発電所も事故がなければ汚染はないことを示している。

No.4～6はたまたま出先などで採取したもの、意図して低い場所を選んだわけではない。



除染後の覆土のために削り取られた山

除染は宅地・農地・道路とそれぞれの境界から20mに対して行われました。除染により表面の土が亡くなった土地には山の土が戻されました。

上の表は、2022年飯館村内から採取した土壌55件（除染対象エリア34件、未除染エリア21件）と非汚染地域の土壌と比較したもの。国内の土壌は1950年代後半から始まった大気圏内核実験の残渣で汚染されている（自然由来の放射性物質も存在するが、ここでは人工的に生成された核物質セシウムについて述べる）。事故前の記録では土壌汚染は10～20Bq/kgだった。原発事故からの復興は飯館村の土壌汚染が事故前の値に戻った時、すなわち空間線量率が0.04～0.05μSv/hに、土壌汚染が10～20/kgに戻った時だ。

3 今福島で起きていること

TV、新聞報道などですでにご存じと思いますが、昨年8月末に双葉町の避難指示解除をはじめとして、従来「帰還困難区域」として指定されていた地域で、「帰りたい住民がいるから」と徐々に解除を進めています。今年5月1日飯館村で唯一帰還困難区域に指定されていた長泥地区が解除された。その解除の条件が、年間被ばく量が20ミリシーベルト（mSv）以下とされており、時間当たり3.8μSv/hとされた。本来20mSv/年間を毎時にするると約2.28μSv/hだが、3.8μSv/hになる理由は下の式による。

屋外で8時間、遮蔽率60%の屋内で16時間過ごす

$$8 \text{ 時間} \times 3.8 \mu\text{Sv/h} = 30.4 \mu\text{Sv} \quad \dots \textcircled{1}$$

$$16 \text{ 時間} \times (3.8 \mu\text{Sv} \times 0.4) = 24.32 \mu\text{Sv} \quad \dots \textcircled{2}$$

$$(\textcircled{1} + \textcircled{2}) \times 365 \text{ 日} = 19,972.8 \mu\text{Sv} \\ = 19.97 \text{ mSv}$$

村の状況(2023.4.1現在)

避難指示解除 2017年3月31日

事項	人数	世帯数	世帯当たり	備考	説明
①事故前 (2011.1.1)	6,544	1,716	3.81		事故前の住民登録数
②事故前	6,544	3,200	2.05	分離非難による	事故直後 (2011.7)
③2023年4月1日現在	4,767	2,144	2.22	住民登録者数 -14	現在の住民登録者
④帰還者	1,216	636	1.91	-8	住民登録者の中で村内居住を村に申し出た数
⑤転入	229	115	1.99	+5	避難指示解除後 (2017.4) 村に転入した数
⑥転出	8			+1	出生 (避難指示解除後出生し村内に居住)
⑦村内避難	3	3	1.00	長泥地区住民	村内避難 (帰宅困難区域の長泥地区の人が村内に居住している数)
⑧未避難者	5	2	2.50		未避難 (避難指示後一度も避難しなかった数)
⑨いいたてホーム入居	39	39	1.00		いいたてホーム入居者数
⑩村内居住者計	1,500	795	1.89	-3	村内居住者 (④～⑨計)
⑪県内避難者	3,107	1,253	2.48		県内避難者
⑫県避難者	157	93	1.69		県外避難者
⑬不明	3	3	1.00		
福島県外避難者	21,101			(2023年2月2日現在)	県全体で県外に避難している人

「生活線量」なる言葉を編み出し3.8μSv/h以下を帰還の条件にした。そもそも、事故前は一般公衆に許されている追加被ばく量は年間1mSv(1,000μSv)、現在も福島県以外はこの値が適用されている。

事故前の福島県内でも屋内外差はなかった、屋外で8時間、屋内で16時間が万人の行動パターンでない、全ての家屋の遮蔽率が60%はあり得ない、それを強引に当てはめて規制値を上げていく手法は、国民の命を守る国がやる事ではない。予防原則に従い可能な限り被ばくをさせない規制値を取るべきだ。原発事故が起きたら年間1mSvは守れない、ならば基準を下げるという暴挙です。

現に医療機関などで見える放射線管理区域の規制値を時間当たりになると0.6μSvです、この区域は業務が終われば直ちに退室することになっています。飯舘村ではそれらの規制値より高い場所でも、立ち入り禁止の看板もない、それどころが昨年のGWにオートキャンプ場をオープンした。避難指示解除には年齢制限がない、若者たちの放射線被ばくの感受性が高いのは公知の事実で、子どもたちを含め何の制限もなく居住させても良いのかを問いたい。

原発事故の加害者である国と東電は原状回復の責任があります、加害者責任を果たすべきです。

4 飯舘村は

私が住む飯舘村は面積230平方キロメートルと広大な面積の村に6,500人が住む村だった、因みに大阪市は225平方キロメートルの面積に275万人居住している。「日本で最も美しい村連合」に加盟が許されていることで、自然の豊かさをご理解いただけたと思う。

2017年3月末で避難指示が(長泥行政区を除き)解除された、その長泥行政区も本年5月1日に避難指示が解除され、全村避難指示が解除された。しかし原発特措法で二地域居住(住民登録は村、生活は避難先自治体)が認められ県内外に3,264名(68.5%)が現在も避難を続けている。

今年4月現在の村内居住者1,500人の68.8%が60歳以上、高齢化率56.6%の村。(事故前の2011年1月現在では60才以上36.5%、高齢化率28.7%だった)。

生活インフラ

生活インフラでは電気、ガス、水道（提供範囲は限定的）などは回復している、公共交通機関は震災前からなかった。

① 医療サービス…毎週火曜日（終日）、木曜日（午前）、内科と外科のみ。帰還者の大半が高齢者であり、歯科、整形外科、皮膚科、眼科などニーズが多いが対応できない。



②



③



①道の駅

②飯舘村中心部

村役場や老人ホーム、病院がある。

③飯舘村にあるうどん屋のメニュー

② 介護サービス…特別養護老人ホーム（収容定員130名）は職員不足のため39名の収容にとどまっている。在宅介護、ショートステイなどのサービスは近隣自治体に依存。

③ 食料調達…コンビニ1件、道の駅の売店1件、移動販売車が巡回している。調達出来ないものは、隣の川俣町、南相馬市に出向く、何れも車で片道30～40分を要し、急峻な坂道を通る。

④ 飲食店…道の駅のレストラン、うどん屋、洋食レストラン、食堂（ソールフード）。

⑤ 郵便局&宅配…二枚橋局、小宮簡易郵便局開設中。宅配サービスは回復。

⑥ 交通サービス…村内に公共交通機関は無い、福島市～南相馬市へのバスが一日6往復。帰村者が高齢者であることから、村で通院、買い物サービスを実施。

生活物資調達、通院など車が無いと不便な生活を強いられる、免許返上になれば村では生活できない。

教育環境

村外で開設していた仮設教育施設を2018年4月から村内で開始。村内の保育園を認定こども園とし新設、村内に三校あった小学校と中学校を改修して、小中一貫校として開設した。

2023年4月現在の就園・就学人数

認定こども園 … 33人（村内在住者12人）

小中一貫校 … 82人（村内在住者38人）

認定こども園、小中一貫校で115人が就園、就学している。内、村内から50名が通っている。その他は避難先からの通園、通学。住民登録者中の15才以下は374人なので約70%は避難先（村外）の施設に就園、就学している。



（上）認定こども園

（下）小中一貫校



①線量計

②2016年2月の京都大学原子炉実験所（現京都大学複合原子力科学研究所）の正門脇に設置されたMP。

表示は32nGy/hとあります、N（ナノ）は10億分の1で0.032μGyです。

③2023年5月の飯館村蕨平に国（規制庁）が設置したMP。表示は0.255μGyとあり、255nGyです。

5 放射線を測る

現在の飯館村は除染土を詰めたフレコンバッグも中間貯蔵施設に運ばれ（道路沿いの見える場所）は、原発事故を思わせるものは無く、箱物と言われる施設が建設され復興をアピールしている。

放射線は人の五感には一切感じない、それら測るのが線量計とモニタリングポスト（MP）だ。MPは村内に国（環境省）設置（44基）、県設置（13基）、村設置（90基）あわせて147基設置されている。

2023年6月1日の147基の平均は時間当たり0.304μSv、最小値は0.084μSv/h（上飯樋地区）、最大値は1.203μSv/h（5月1日避難指示解除された長泥地区）です。

事故前の飯館村の放射線のデータがないのですが、一般的には0.04〜0.05μSvとされている。私が事故後各地で測定した値も0.036μSv/h（北海道平取町二風谷）が最低で多くは0.05μSv/h程度で、事故前の飯館村もこの範囲だったと思う。

モニタリングポスト（MP）

MPは原発や核物質を扱う施設からの放射能漏れを監視する装置で、原発や核物質を扱う施設の敷地境界に設置されている。

放射線単位

村内設置のMP147基の大半はSv（マイクロシーベルト）で表示している。7Svの環境で一時間過ごすと100人中100人が死ぬ値。表示単位はGyとSvが使われますが、GyとSv換算1Gy=0.8Sv。

放射能単位

放射線を発する放射性物質の量を表す単位はBq（ベクレル）で、通常1kg当たりで表される。

1Sv

= 1,000 mSv
= 1,000,000 μSv
= 10,000,000,000 nSv
(ナノシーベルト)

1Bq

= 1,000 mBq
(ミリベクレル)
= 1,000,000 μBq
(マイクロベクレル)
= 10,000,000,000 nBq
(ナノベクレル)

MPは役割を果たしているか



MPの本来の目的は原発や核施設からの新たな放射能漏れを検知するため、設置基準として周辺を除染し過去の汚染を除去する。飯館村のMPもその設置基準を適用されている（あるいは設置場所が除染対象のため）、周辺の土壌を入れ替えが行われ線量率が下がった値が表示される。

飯館村設置のMPの問題



山津見神社

狼信仰で、狛犬ではなく狼が出迎えてくれます。2013年に火事で拝殿が焼失しましたが、東京芸術大学の学生によって狼の天井絵が復元されました。

これは土壌の状態を反映しており、MP足下の土壌は221Bq/kg、道路向かいは約15,000Bq/kg（本来道路境界から20メートルは除染対象でMP足下と同じ値になるべきですが、手抜き除染）、山頂は約32,000Bq/kgを示す。

MPの値は0.48 μ Sv、持参した線量計（PDR-111）の値は0.53 μ Sv、これは機器による誤差の範囲で許される誤差。10メートル離れた道路向かいの値0.95 μ Sv（除染範囲）、山頂（未除染）は1.26 μ Svを示している。

左上の写真は飯館村深谷地区のMP。

プロフィール

伊藤 延由
(いとう のぶよし)

1943年 11月生まれ

2010年 飯館村の農業研修所

「いいたてふあーむ」の管理人に就く
管理人の傍ら、水田2.2ha、畑1.0haを耕作

2011年 2年目の準備を目前に被災

6月末福島市内へ避難

11月「飯館村新天地を求める会」
を立ち上げ活動



これが原発事故の実像。

飯館村を汚染している放射性物質はセシウム134、137で、セシウム134の半減期は約2年で、12年を経た現在はセシウム総量の3%程度まで低下した。セシウム137の半減期（30年）で減衰するのを待つしかない。300年を経ると1/1,000になるのを待つのみだ。

6 終わりに

福島の福幸(ふっこう)のために (農と交流からの再生)

2023年7月9日(日)に開催された渡邊とみ子さんの講演会に参加させていただきました。講演の内容を抜粋して紹介いたします。

渡邊さんは飯舘村で「いいたて雪っ娘」というカボチャの生産や販売、六次化商品開発に取り組んでいらっしゃいます。東日本大震災後は福島市に移り、避難した女性を支援する「かーちゃんの力プロジェクト」を福島大学小規模自治体研究所の先生たちと発足。2017年4月の避難指示解除後は飯舘村での農業を再開。今回の講演会では震災前後～現在に至るまでのお話を伺いました。



第3回クオリティライフ
顕彰事業受賞

私の原点／飯舘村での暮らし／

10年間ごとの村のスローガンとして振興計画があります。第4次(平成7～16年度)と第5次(平成17～26年度)総合振興計画に私は関わりました。その時のキャッチフレーズが、第4次は「クオリティ・ライフ・いいたて」、第5次は「までいいライフ・いいたて(飯舘流スローライフ)」でした。忙しくせかせか生きるよりも足元を見つめて暮らしていこうじゃないかということ。平成元年ごろから農繁期に女性がヨーロッパに研修に行く「若妻の翼の会(平成元年～5年度実施)」というユニークな取り組みが飯舘で行われ、女性の登用が盛んに行われるようになりました。義父から「とみ子、人は誰でも一番つてもものを持っているからそれを活かしていけ。おまえは田んぼやるよりは人を

使ってやるくらいになんきやだめだ。」と言ってもらいました。関わったみんなが1人1役としてやっていく体制が良かったのかなと思います。地域づくりの中で菅野元一さんという方に出会います。この方は「クオリティライフ顕彰事業」の審査に来てくれました。今はこの風景はありませんが、手作りで夫や私たちがやっていました。素敵な空間でしたが、原発事故で避難して全部解体されて今はもう草になってしまいました。

イータテベイクじやがいも研究会

飯舘村出身の高校教諭である菅野元一さんが品種登録した「イータテベイク」というじやがいもを地域振興のためにと渡してくれて、7つの新規の作物研究会ができました。私も「イータテベイクじやがいも研究会」に誘われて設立総会に10分ほど遅刻したら、あとは会長の座だけが残っていてそこが埋まらないと始まらない、ということ。軽い気持ちで参加しましたが、でも、入ってみてこれは大変なことだということ。2年目になると設立したメンバーがどんどん辞めていきました。それまでリーダーになったことのない私は悩みましたが、残ったメンバーに「会

長、何かをやるうとすれば、必ず誹謗中傷の雨霰だけど、私たちの先頭を引っ張って走ってくれ。」と言われ、なんとかやってこられました。

育成者の菅野元一さんは『現代農業』に何度も載るような素晴らしい育種家なのですが、この方の講演を初めて聞いたときはびっくりしました。「外は雪、こたつに入って嫁・姑の悪口ばかり言っているのではなく、一円でもお金になるようなことを考えろ」と。飯館は寒いんです。寒いからってこたつに入ってお茶飲んで噂話しているのではなくって一円でもお金を稼ぐことを考えろ。そして、起きてしまったことを嘆いてばかりじゃなくて対策を考えろ、と。これは私が原発事故で避難したときに本当に役に立った教えます。世界に通用するじやがいも、かぼちゃを飯館村から発信するという先生なので、目標が高くて私たちも大変なのですが、志



イータテベイク
の花

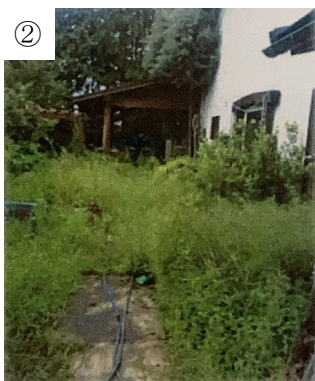
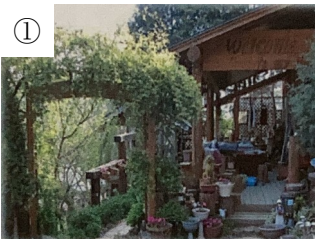
をしつかり持って一緒にやっていくことが今に至っていると思います。

そして、加工場「までい工房 美彩恋人（びさいれんと）」を立ち上げました。まだまだ男性社会の時で、女性が事業をやるのが馴染まなくて色々言われました。「びさいれんと」はメンバーの名前から一文字ずつもらいました。「Be silent」＝ちょっと黙ってて、という意味も込めて付けました。当時、お嫁さんたちは月2〜3万のお小遣いで生活していたので、出資をして何かをするのは難しかった。私の夫が大工だったので、納屋を改造することで加工場を作ることができました。ただ、半端じゃないお金がかかります。村のベンチャー支援事業で200万円補助していただき、600万ほど借金して設立しました。食に関することはいくくの素人ですぐに売れる商品なんてあるわけなく、電気料金を払えないくらい大変な時期もありました。仲良しグループやサークル感覚でやっていては本当にダメだと身に沁みてわかりました。目標が高ければ高いほど険しい道のりだけでも、一歩踏み出さないとゴールなんてない、ということです。

原発事故〜全て奪われてしまった〜

設立5年頃に記念行事を予定していましたが、原発事故で飯館村は全村避難になりました。合格すれば種イモを飯館村から世の中に出せるという矢先に原発事故によって飯館村で生産できなくなりました。次の年の12月にお正月飾りを持っていったときに、荒廃した風景を目にして悔しくなりませんでした。

この姿を見るたび涙が
溢れてならない



①原発事故前の工房入り口
②避難後4カ月の姿
③2012年12月



①種芋生産の第1期検査

ばれいしょ植物防疫補助員の仕事

②夫の理解が一番の原動力

③避難先でいいたて雪っ娘を生産

④避難先でのいいたて雪っ娘を収穫祭



結もち・プロジェクト

人と人を結ぶ、地域と地域を結ぶ
という「結」の気持ちからプロ
ジェクト名が決まりました。

飯舘村での生産はできなくなりましたが、種は蒔かなくてはならないという思いが私にはありました。原発事故を理由に辞める道を選べば楽だったと思います。だけど、菅野元一先生は私たちに、どちらか選ぶときに楽な方を選ぶな、とおっしゃいました。その言葉もあって、私はいいたて雪っ娘を自分の避難先で蒔きました。夫も私についてきて、初めてじゃがいもの種イモの生産の現場に行きました。大変な仕事だ、と言っていました。朝早く起きて現場まで行って検査をして、なんとか種イモとして合格させました。避難先に住民を呼んでいいたて雪っ娘の収穫祭を開催しました。

かーちゃんの力・プロジェクト開始

収穫祭が終わった頃に、地域づくりなどで交流のあった福島大学の千葉悦子先生たちから連絡がありました。その連絡で「かーちゃんの力・プロジェクト」という構想を聞きました。

私は当時57歳で事業を立ち上げた経験はありましたが、どう大学と地域と関わっていけばいいかわかりませんでした。そんな大変なとき、川内村のお母さんたちが作った凍大根の煮物が身体にスーッと入ってきました。こういうことを避難した市町村のかーちゃんたちとできたら、という話を聞いて前向きにやることになりました。

避難から約半年後の10月19日に大学の契約職員として参加しました。リストアップしたかーちゃんたちを訪ね歩き、今どうしているのか話を聞きました。常に前向きに働いていたお母さんたちだったので、仮設住宅で支援を受けるだけの生活ではなく何かできることはないか、という思いを抱えていました。秋頃だったので、お餅について「結もち プロジェクト」を開催しました。

当然、放射性物質の検査をしなければなりません。当時、国の基準は1kg当たり500Bqでした。飯舘の名前を出すならとみちゃん（私）の中で安心安全基準を決めな、と言われましたが、安心安全基準が分かりません。ウクライナの基準では野菜が40Bqだとわかり、私は半分の20Bqを自主基準にしようと決めました。それが皆さんに応援、理解していただけるきっかけになりました。でも勝手に私が決めた基準で、1年間育てたものが基準以上になつたらどうするか、と本当に綱渡り状態でした。かなりの覚悟の上でした。検査の結果セシウム137、134ともに当時は25Bq以下のNDで安心して出荷できました。



秩父農工生との連携
阿武隈の凍み文化の継承と
あぶくまの食の遺産継承



漬物づくり
(2012年1月)



かーちゃん弁当の
研究発表会
(2012年5月)

避難先の地域の方と一緒に色々な団体の協力で結もちプロジェクトをやりました。避難するときに餅つき機なんて持ってこられなかったの
で、餅をやるとかーちゃんたちに言うとき
喜んでくれました。久しぶりにみんなでやれて
嬉しいと言っていました。かーちゃんたちは初
めの会議のとき自己紹介をしながら泣いてい
ました。でもプロジェクトをやったあとは楽し
かった、またやりたいという声が上がりました。
私の雇用契約が切れたあと、大学の先生が
色々助成金を申請してかーちゃんたち12名を
雇用してくれて弁当づくりや漬物づくりが始ま
りました。放射性物質の検査のため必ず1kg
は検体に出さなければならず、弁当だったら毎
日3個は検体としてぐちゃぐちゃにされる。
かーちゃんたちはこの姿を見たときに、ああ
こんな思いをしてまでやりたくない、と泣いて
いました。とはい
え、私たちが自主基
準を決めたわけです
から、ちゃんと検査
しなければならなり
ません。当時から私



放射能検査後の
無残な検体

たちが決めた20Bq以上のものは出ませんでした。かーちゃんたちもただではおきません。
ぐちゃぐちゃにされた弁当をリベンジ焼き、お
やき風にして自分たちのまかないにしました。
これには私もびつくりしました。ものを大事に
する、無駄にしない精神がかーちゃんたちには
ありました。
避難をしていると、いろんな伝統行事ができ
なくなりました。伝統行事とともに伝統食もあ
ります。埼玉県の秩父農工の子どもたちがNH
Kの「ごはんDE笑顔プロジェクト」で、種を
つなぐ、凍み文化を受け継ぎたい、というラブ
レターをいただきました。一緒にやりましよ
う、と。子どもたちはかーちゃんたちとお弁当
を食べるとき、最初はスポーツ座りでいたので
すが、だんだん正座をして泣いていました。南
相馬で現状を見たときにまだ船や車が津波で流
されたままだったようで、ある女子生徒が「先
生、ここに人がいたんだろうかね。」と泣いて
海の彼方を見ていたそうです。この子たちと一
緒にプロジェクトを進めてきました。これもす
ごくいい思い出になったのかなと思います。彼
らたちがだんだん卒業していつか20歳過ぎたと
きに一緒に酒を飲みました。

活動の転換期・避難解除になり

2017年3月31日の避難解除をもって、かーちゃんの力・プロジェクトも卒業になりました。最後の1年は地元に戻っても自立できるように、弁当を時給制ではなく請負制にしてやってもらいました。終わってから、「いいたて雪っ娘かぼちゃプロジェクト協議会」の残ったメンバーと一緒に立ち上げて、色々と今の活動をやっています。

とみ子さんはどうしてそんなに元気なの？といつも言われます。新しいことや目立ったことをやれば必ず叩かれる。でも、なぜ自分がここにいるのか迷ったときは必ず原点に戻ります。昔書いていたブログを読み返して、「そうだ、私はこのためにやっているんだ」と自分に言い



除染は終わっても肥沃な土は奪われてしまった。



飯舘村の圃場で作られた
いいたて雪っ娘
種や種の皮も放射性物質
の検査を行いました。

聞かせてやっています。今は業としてまで工房の商品が売れて自立できるように頑張っていると思っています。

汚染された飯舘村の営農再開なんて何十年もできないだろうと思っていました。でも、除染が進む中で肥料分析や放射性物質の検査など色々して、とりあえずやってみようと思って種を蒔きました。心配だった放射性物質は出るまで測って2・0程度でした。国が定めるのは100Bqですから問題なく出荷できるようになりました。村にちゃんと届出を出して出荷しました。かぼちゃをやるようになったときに、村の中で3件以上の検体を県の調査に出してOKが出れば出荷できるのですが、私は個人でも検査してから出荷しています。いつまで続くんだろうと思いがちです。

避難解除・までい工房美彩恋人の活動

までい工房美彩恋人では3本の柱を掲げて活動しています。伝えます・広めます・繋ぎます、の3つです。「伝えます」というのは、語り部として福島の実状をお知らせしたり、研修の受け入れをしてお話をして福島のことを伝える活動です。伝統食の中の私の得意料理の一つの味噌じゃがの作り方を教えたこともあります。福島のがいがいもを持って行って検査機で測って安全を確認して、その伝統食をみんなで一緒に作りながら語り部をやりました。商品として生産・加工・販売を通して広めています。避難生活で色々なものが失われてしまった。小さい子どもたちにも安全で安心なものを食べていたきたい。伝統行事の中で「だんごさし」というものがあります。白や赤、黄、緑などの団子を作って、五穀豊穡を願って「みずき」という木に花を咲かせたように飾ります。こうした体験の場を通して子どもたちに伝統行事を繋いでいく活動もしています。



避難解除・二地域居住の課題解決に向けて

今は二地域居住で、福島市と飯舘村を行ったり来たりしています。夫は67歳で5年前に亡くなりました。震災前から夫と同じ夢を持っていた。農泊をやりたいなということでした。農泊をやっていると、向かって今進んでいるところです。これができれば夫との夢は1つ達成できるかなと。

食と農の交流からの再生ということで、皆さんとこうしてお話しさせていただくことで少しご理解をいただけたとしても、やはり福島に来ていただくにまざるものではありません。

飯舘村の星はすごくきれいなんです。満天の星の下で線香花火をやって、本当に田舎暮らしは素敵だなと思える空間が飯舘村にはあります。ぜひ機会があったら皆さんも福島に足を運んでいただきたいです。夜には皆さんお楽しみの、居酒屋とみちやんが開店します。私の手作り料理や皆さんが持ち寄ったもので交流します。こういった交流を地元に来て自分たちで感じていただきたい。こうした交流がずっと続いているのは本当にありがたいと思います。もては心なく心の復興と自立への道がとても重要だと私は思っています。

辛かった時、現場から学んだこととして、2011年に小さな種を蒔きました。元一先生は避難するときに本命の種をなくしてしまいました。必ず予備の予備まで取っておく先生なので、その予備でなんとか今につながっています。そのとき、あんな大変なところで芽を出してくれた雪つ娘を見て私も泣いてしまいました。本当に辛かったんですね、いろんなことがあって。でも雪つ娘を見ていたら、自分がへこたれちゃいけない、諦めちゃダメだな。そんなふうに思ってた私が書いた詩です。

あきらめないことにしたの

沢山悔しい思いをしたよね

沢山、沢山泣いたよ

でも、生きてる

やっぱり止まっては駄目だよ

どんなに小さな一歩でも前へ進んだら

ほらね。実ってくれたんだもの

植物は、こんな状況の中でも

頑張ってるんだもの

だから私は

あきらめないことにしたの



最後に、私の持論として全ての答えは現場にあります。何かをやるうとすれば困難にぶつかる事もある。何もやらなければ何も残らないし、何の成長もない。とかくやらない人程、理由付けをする。私は夫と姑の在宅介護・在宅看取りを経験しました。この経験をして自分の考えも変わってくる。自分の都合でやるのではなく、お客さんの方を見ることを学びました。歳をとると色々な経験があつて色々な学びがあつたなと思います。しかし、撒かない種には芽もでないし、実もならない。

あのとき、原発事故を理由にやらない選択肢を選ぶことは楽だったかもしれません。でも、ちゃんと種を蒔いたから種がつかうて今がある。未来を見て対策を考えて生きてきた、仲間と一緒に歴史を作ってきました。元一先生がよく言っていたかけてきた時間は誰にも取り返せない、ということ。伊達市の名誉町民第1号の大石さんの言葉です。「凡人が賢く生きる唯一の方法は一つのことを諦めないで継続してやっていくこと」まさに諦めないで継続してやってきたからこそ種がつかうて今こうして皆さんもお会いできたということになっているのではないかなと思います。

夏だより チェルノブイリ医療支援ネットワークとの十年（前編）

EP3CT



外観の美しさで有名なブレスト・ターミナル駅（冬に撮影）

私がチェルノブイリ医療支援ネットワーク（CMN）の活動に携わらせていただいて、来年（2024年）秋で十年目を迎えます。2011年に語学留学に来てから在住するミンスク（現在は大学院課程を修了したジャーナリズム学部で準博士号論文執筆中）で、2013年に訪ベラのメンバーとして来ていた川原秀之事務局長と知り合う機会があり、翌2014年の現地医療支援活動に第二通訳（山田英雄医療顧問のアシスタント）として参加させてもらうことになりました。

2014年の9月21日、ブレスト（市）ターミナル駅で訪ベラのメンバーを迎えて私のCMNにおける活動はスタートしました。列車から降りてくる参加者には、日本医科大学名誉教授の清水一雄医師と助手として同行していた産婦人科医の高橋恵理佳さん、村瀬幸宏臨床検査技師、河上雅夫（当時）理事長、そして山田英雄（医療専門）通訳がいました。まずヘインツリーストンホテルにチェックインして、隣接するヘツムンデパートでの買い物（山田さんとお土産を吟味して選び）や三角屋根のレストランでの昼食（注文した牛肉ステーキの量があまりに大き

（上）写真右からアルツールさん、村瀬先生、左端が清水先生
（下）写真左から河上さん、アルツールさん、ヴァロージャさん



かったので、二三人で分けて苦笑いしながら口にしましたが、その美味しさに以後行きつけの飲食店となります）を一緒にしたり、市内にある茶道教室（地元の友人が主催したお茶会に招待してくれました）に行くなどして皆さんと打ち解けていきました。

翌日からはブレスト州立内分泌診療所を訪問して、CMNと長い付き合いのアルツール・グリゴロヴィッチ院長やヴァジーミル・シヴダ医師とともに本格的な医療支援活動の開始です。アルツール院長は患者さんへの診察や治療

の施し、医学研究・学会発表に務め、地域・国内外の医療連携推進にも取り組むなど大忙しですが、私達が来る時は必ず優先してスケジュールを調整してくれます。通称ヴァロージャ先生ことヴァラーミル医師は、移動検診車でブレスト州の各地区をまわり、多くの住人の診察を行っています。この二人のコンビによる力もあり、ブレスト州では甲状腺疾患の早期発見率が

上がり、適切な治療を受けるためのシステムが確立しています。彼らは「これも、CMNから提供してもらった医療機器、日本への医学研修や訪ベラ時の日本人医師との意見交換や診療・手術の実践指導のおかげです！」と感謝を忘れません。

た面持ちの彼女を清水先生の落ち着いた詳細説明、山田さんの的確な表現（通訳）で安心させます。後日、手術を終えたばかりのスペトラーナさんは、見舞いに来た私達を笑顔で迎えてくれました。清水先生は術後に、責任と誠意を持って患者さんの心身の経過状態を診ることも大切にされています。この手術の特徴は、切開の傷跡がほとんど残らず（若い女性にとってはとくに大事なことです）、声も術後すぐ出せて入院も数日で済むことです。この技術を現地の医師達へ直に指導していきます。実践的な【医療】支援というのを初めて知った思いでした。

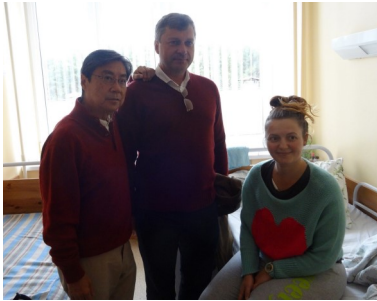
ブレスト内分泌診療所では主に村瀬先生が行うプレパラートの顕微鏡検査に付き添い通訳、それから河上さん、高橋さんと検診に訪れた患者さん達へのインタビューをしました。そして、訪ベラでのメインともいえる活動を目の当たりにします。清水先生が執刀する甲状腺内視鏡手術を（この訪問時に）受けるスペトラーナさん（30歳・女性）が診察に来ました。緊張し



（右上）顕微鏡検査の説明

（左上）診察に訪れた方（写真中央）へのインタビュー

（左下）内視鏡手術を受けるスペトラーナさん



サーカス場の前で

（写真中央に清水先生、その右横が村津先生、左横は高橋さん）

ブレストから首都ミンスクに戻った皆さんが、大使館、赤十字、（清水先生の内視鏡手術における名誉医学博士号の授与式が行われた）医学再教育アカデミーの訪問を終えたあとと再び合流して、残りの自由時間で町の観光をする事になりました。友達（当時歴史学科に通う大学生と大学院生の男の子ふたり）にも手伝ってもらい、サーカスを見に行ってから美しい風景の場所を散策しながらお土産屋や郷土料理の店に寄りました。現地に住む若者との交流で互いの文化をより深く知る機会に喜んでもらえて嬉しかったです。こうして、初めての訪ベラ通

訳業務が終了しましたが、医療現場で頼りっぱなしだった大先輩の山田さんから別れ際に「おう、ありがとうなあ！すっかり、がんばつていけや！」と広島弁でねぎらいの声をかけてもらい、またこのメンバーと一緒にこの支援活動とともにしたい気持ちが一層強くなりました。

2016年1月、訪ベラ中の山田さんから連絡が入り、その時ミンスクの教育大学で原発被災者心理学シンポジウムに参加した獨協医科大学准教授の木村真三先生と心理学専攻教員のリュドミラ・ウクラインカさんと引き合わせてもらいました。

リュドミラさんは15歳の時に受けた甲状腺全摘手術後に頸部と心に傷を負った経験から心理カウンセリングを学ぶようになりました。優しい笑顔のなかに垣間見える少し悲しげな眼差し、何か深い人生経験を積んできた方だというのが第一印象でした。実際は動物・自然・スポーツが大好きな多趣味な女性で、ひとり娘のアンナちゃん（当時11歳）を可愛がる明るいお母さんでもあります。山田さんのことは実の父のように慕っていました。

木村先生は国際疫学研究の第一人者であり、様々な分野の知識が実に豊富で子供から大人までいろいろな年齢層・国籍の人とどんな話題でも話せます。現場主義でそこに住む人々とのコミュニケーションを大事にしており、ある程度の現地語も勉強されて分かるので、先生の前では大ざっぱな通訳はできません。この時に口になされていた、今の医療支援活動に大きな役割を果たしている『人と人とのつながり』（CMNの皆さんが築き上げてきた現地での信頼関係）の大切さが心に残っています。

2016年4月の訪ベラは、チェルノブイリ原発事故（1986年4月26日）後30年に合わせた時期となりました。メンバーは清水先生、木村先生、渡會泰彦先生（日本医科大学付属病院臨床検査技師の先生ですが、本を持参して現地の言葉も学ぼうとしていました）、山田さんと河上さん、それに福岡放送FBSのスタッフさん二人（ディレクターとカメラマン）が番組制作のため同行しました。私はFBS取材班の通訳としての参加となりました。今回は皆さんがミンスクに到着してから、帰国の途に就くまでフルで行動をとりました。



聖シモン・聖エレーナ教会とその敷地内にある長崎の鐘（写真右）

ブレスト出発前に、FBSクルーとミンスク中心部に建つカトリックの「聖シモン・聖エレーナ教会」を撮影しました。教会の敷地内には長崎の浦上天主堂から贈られた「長崎の鐘」があり、その下には原爆被害に遭った広島と長崎、原発事故の起きた福島の土が入ったカプセルが埋められており、そのような放射能汚染の悲劇が繰り返さないように恒久平和を願うシンボルとなっています。ここに「長崎の鐘」が設置された2000年には、浦上天主堂の「被爆マリア像」も巡礼するなど日本とゆかりある場所となっています。そこを訪れていた方々に、間もなく発生から30年が経過しようとしていたチェルノブ



清水先生を訪ねてきたアリョーシャさん
(息子さんと)



(上) エレーナさん
(下) スペトラーナさん



(上) 内視鏡手術中
(下) イーゴリ医師に技術
指導する清水先生



イリ原発事故について話をききました。深刻な顔で当時のことを振り返りながら語っているうちに泣き崩れてしまう年配の女性の方もいました。思い出すのもつらい歴史的惨事だったことがうかがえて、二度とこのような悲劇が起きないように切に祈る気持ちがひしひしと伝わってきました。

ブレストでは先ず州立病院を訪れ、清水先生執刀の甲状腺内視鏡手術を受けるエレーナさん（31歳・女性）の診察がはじまります。今回はFBSの撮影班とともにオペに立ち会うことになりました。人生で初めての経験でした。首と胸の間ぐらいに小さく切開した箇所から小型カメラの付いた細いチューブのようなスコープを入れて、体内を映し出したスクリーン画面を見ながら慎重に腫瘍を切除していきます。途中、甲状腺のそばにある声帯神経などを切らないよう気をつけながら腫瘍摘出手術を行います。清水先生は助手として参加したイーゴリ・ラジエフスキー第一外科棟主任（清水先生の教えを受けた現地では甲状腺内視鏡手術の第一人者となる）に技術的なことを丁寧に指導しながら摘出手術を完遂していきます。約2時間続いた手術中、この師弟間の会話は万国共通の医療英語

と、自身も医学専門知識に長ける山田さんの通訳で成立していきます。この活動における医療通訳の重要性を実感しました。

ブレスト内分泌診療所に行くと、日本からの訪ベラ・メンバーとアルツール院長を大勢のマスコミ関係者が囲み取材をしました。この医療提携・協力活動に対する現地での関心の高さがうかがえます。インタビューの中には、自分が過去に受けた甲状腺手術跡を見せながら涙する女性ジャーナリストもいて、心を打たれました。また、これまでに清水先生が内視鏡手術をした二人の女性が挨拶と経過報告に訪ねてきました。ひとりは2007年に日本医科大学で手術を受けたアリョーシャさんです。術後に結婚・出産し幸せに暮らしている彼女の経験は、甲状腺疾患のある若い世代の人達の不安を取り除く希望となっています。今回も愛する家族（夫と幼い息子）と清水先生に会いに来ました。もうひとりの訪問者は、私が初めて参加させてもらった訪ベラ時（2014年9月）に手術を受けたスペトラーナさんでしたが、あまりの明るい変わりように誰もすぐには気づきませんでした。彼女のとても晴れやかになった表情、元気いっぱいの声、色鮮やかな着こなし



国立放射線医学教育センター



清水先生の演説



赤十字社でのディスカッション
(向こう側の列左から度會先生、清水先生、河上さん)

は、傷跡が目立たなく健康生活に支障をきたさない内視鏡手術のメリットを物語っています。このおかげで容姿も心も明るく美しくビフォー・アフターできたという彼女は、清水先生にその嬉しい気持ちと感謝をとびつきの笑顔で伝えていました。

ブレスト訪問後、チェルノブイリ事故30周年国際会議が行われるゴメリ市の国立放射線医学環境センターへ向けて出発しました。その会議では、生涯許容被曝線量を決定した方をはじめ著名な学者達とともに清水先生が《現地における甲状腺内視鏡手術について》を、木村先生が《福島原発事故による放射能汚染測定の結果》をテーマに講演しました。私は聴衆席に座っ

て、隣にいたFBSのスタッフさんに各発表の内容を伝えていましたが、内容がかなり専門的で正確に全て訳すことが間に合わなかった苦い経験でした（後で山田さんに確認して講演内容の詳細を教えてもらいました）。清水先生の英語での講演を伝えた現地スタッフの若い通訳さんと木村先生の報告を訳した山田さんの逐次通訳術を学びながら、使う言語だけでなく訳す話の内容に沿った分野の知識も（この場合は医学に関する）勉強する必要性を感じました。

ミンスクに戻り、赤十字社に今回の活動報告に行きました。ここも自分にとっては初めての訪問場所で、双方の話し合い・意見交換を訳していきました。その過程で、この赤十字社とC

紙面の都合上紹介できなかったコラムは
団体ウェブサイトにて
公開しています。
ぜひご覧ください。



田中仁（たなかひとし）

ベラルーシ国立大学在学中から、フリーランスのジャーナリスト、通訳として国内外の新聞や雑誌で活躍中。ミンスク在住。

MNとの信頼・協力関係が長く続いていることを知りました。90年代、ゼロからスタートして多くの現地関係機関とここまで提携を進展させてきたCMN創成期メンバーの山田さんと河上さんをはじめとしたこの団体の功績には大きなリスペクトの気持ちを持っています。次回このメンバーと会うまでにはもっと語学力をアップさせ専門知識を豊富にして、いろいろな場面で皆さんの力になれるよう頑張ろうと決めた二回目の訪ベラ同行でした。



リサイクル募金 ましゃぽん

ご支援・ご協力をありがとうございます！

読み終えた本やCDなどで募金ができる「リサイクル募金ましゃぽん」を通じて、たくさんのご寄付をお寄せいただいております。

誠にありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします！

◀ これまでにお寄せいただいた寄付額 ▶

◆◆1,267,463円(439名)◆◆

◆2017年～2020年 810,147円 (290名)

◆2021年 292,268円 (80名)

◆2022年 135,740円 (44名)

◆2023年1月～7月 29,008円 (25名)

あなたのご自宅や職場に眠るお宝が

チェルノブイリ支援につながります



その他、懐かしのおもちゃ、ブリキ玩具(昭和40年代以前のもの)、フィギュア、プラモデル、鉄道模型、洋酒、テレホンカード、商品券、切手、ハガキ、年賀状、カメラレンズ、模型、絵画、万年筆など…

開催予告

食品の安全・安心に関する講演会を開催します。



福島県二本松市で有機農業に取り組んでいらっしゃる菅野正寿さんをお招きし、対面方式での講演会を開催します。

内容は現在検討中ですが、震災から現在に至るまでのお話や、世界一厳しいといわれる福島県農産物の安全基準などについて講演していただく予定です。

詳細が決定次第団体ウェブサイトやSNSでお知らせいたします。

予約は不要ですが、人数把握のため参加希望の方は事務局までご連絡いただけると助かります。

*菅野さんの寄稿文はこちら →→

(通信127号にも掲載されています。)



日時 2023年11月19日(日)

10:00～12:00

場所 堅粕公民館

(福岡市博多区博多駅東1丁目8-2)

参加費 無料



たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計 5,126,055円

*活動支援金 5,081,055円

*のぞみ21カンパ 2,000円

*雪だるま3号カンパ 0円

*東日本支援カンパ 24,000円

*おまかせカンパ 19,000円

(2023年5月～2023年7月分の寄付内訳)

●口座受付寄付

石川睦枝 伊藤達郎 岡本孝二 小野直子 川崎清美 国沢多恵子 高嶋幸雄 高橋武三 田中直子 佃あけみ 中村幸枝 少年少女みなみ久保山菜摘久保山千可子 引田良子 古本募金きしやぼん(運営:嵯峨野株式会社) 水落剛 村上和代 諸限啓子 山田秀子 和田伸夫

「都道府県別」

【東京都】	2名	【千葉県】	1名	【栃木県】	1名
【富山県】	1名	【石川県】	1名	【静岡県】	1名
【愛知県】	1名	【兵庫県】	1名	【鳥取県】	1名
【島根県】	2名	【広島県】	1名	【山口県】	2名
【愛媛県】	4名	【福岡県】	16名	【佐賀県】	2名
【熊本県】	1名	【大分県】	3名	【鹿児島県】	1名

計44名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリーサポーターの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 内野千鶴子 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大崎知恵 太田昌子 大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 財津耐代子 財津悠子 斉藤美代子 阪口香奈子 佐々野也依 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勐子 藤本孝子 淵田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山子より 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 室屋芳乃 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子

計108名(匿名含む)

貴重なご寄付をお寄せいただき、ありがとうございます。皆様よりお預かりしたご寄付は、チエルノブイリ被災者医療支援、福祉工房のぞみ21支援、東日本震災被災者支援、事務費用等にあてさせていただきます。

※通信のお名前掲載をご承諾いただいた方のみ、ご掲載しております。

編集後記

11月に数年ぶりとなる対面方式での講演会の開催が決定しました。有意義な時間となるようにしっかり準備してまいりますので、ぜひお越しください。(K・T)

皆さまからのメッセージ(二部抜粋)

いつもおいしいコーヒーをありがとうございます。ウクレレ、ペルーの原産が心配ですね。

お知らせとお願い

振込

用紙は原則として毎号同封しています。これは「思い立った時にいつでも振り込みできるように、毎号同封してほしい」というご要望があったからです。決してお振込を強要するものではありません。恐れ入りますが、ご不要な方は処分をお願いいたします。

住所

を変更された方は、事務局までお知らせください。なお今後の資料送付がご不要の場合は、お手数ですが、事務局までその旨ご連絡ください。

クレジットカード決済 シンカブルのご案内

クレジットカードで寄付ができる「Syncable(シンカブル)」を導入しています。

団体ウェブサイトに左のQRコードからアクセスが可能です。

*コピー等のお支払にもご利用いただけます。

Syncable

